

平成24年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成24年11月～平成25年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、全般的には「平年並み～やや高め」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年並み。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年を下回り、平年並み。
- (5) ウルメイワシは前年・平年並み。
- (6) カタクチイワシは前年並みで、平年を下回る。

※「前年」は平成23年11月～平成24年3月。「平年」は過去5年の平均値。

問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

担当: 沿岸資源班 新村、中津

電話: 03-3502-8111(内線6800)、直通電話: 03-6744-2377、ファックス: 03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

(予報の詳細についてのお問い合わせ先)

独立行政法人水産総合研究センター 西海区水産研究所 業務推進部

担当: 與世田、岡

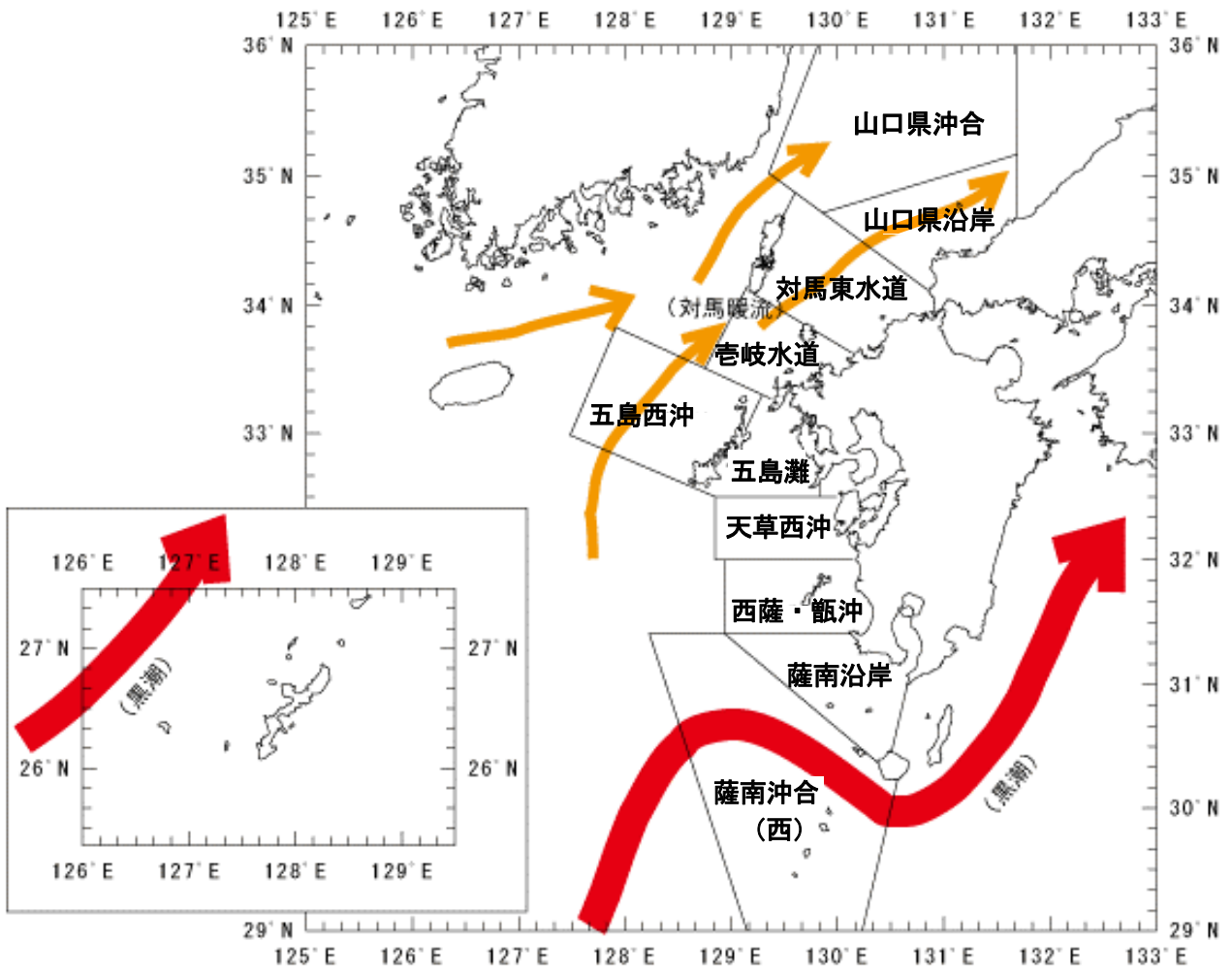
電話: 095-860-1600、ファックス: 095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://snf.fra.affrc.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2012年11月～2013年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合で「やや高め」、対馬東水道、壱岐水道、五島西沖、五島灘、天草西沖、西薩・甌沖、薩南沿岸、沖縄島周辺海域、大陸棚上、黒潮域で「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2012年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4月「かなり低め」、5月～8月「平年並み」、9月「やや低め」。

南部：4月「やや低め」、5月～9月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、7月は「接岸傾向」、他の月は「屋久島南付近での変動（平均的な位置）」で経過。

(2) 海面水温

4月～9月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「平年並み」、5月～9月「やや高め」、10月「平年並み」。

山口県沿岸：4月「平年並み」、5月「かなり高め」、6月「やや高め」、7月「平年並み」、8月「かなり高め」、9月「やや高め」、10月「平年並み」。

対馬東水道：4月「やや高め」、5月「平年並み」、6・7月「やや高め」、8月～10月「平年並み」。

壱岐水道：4・6月「やや高め」、8月「平年並み」。

五島西沖：4月「かなり高め」、6月「やや高め」。

五島灘：4・6・8月「平年並み」。

天草西沖：4月「かなり低め」、5月「やや高め」、6月・8月「平年並み」。

西薩・甌沖：4月「やや低め」、5月「やや高め」、8月「平年並み」。

薩南沿岸：4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。

沖縄島南東：4月「かなり高め」、5・6月「平年並み」、7月「やや高め」、8月「平年並み」、10月「はなはだ低め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月～10月「平年並み」。

山口県沿岸：4・5月「やや低め」、6・7月「平年並み」、8月「やや低め」、9・10月「平年並み」。

対馬東水道：4・5月「やや低め」、6月「平年並み」、7月「やや低め」、8月～10月「平年並み」。

壱岐水道：4月「かなり低め」、6月「やや低め」、8月「平年並み」。

五島西沖：4・6月「はなはだ低め」。

五島灘：4・6月「はなはだ低め」、8月「やや低め」。

天草西沖：4月「やや低め」、5月「平年並み」、6月「はなはだ低め」、8月「平年並み」。

西薩・甌沖：4月「やや低め」、5・8月「平年並み」。

薩南沿岸：4月「はなはだ低め」、5月「やや低め」、8月「平年並み」。

薩南沖合：4月「はなはだ低め」、5月「かなり低め」、8月「平年並み」。

沖縄島南東 : 4月「やや低め」、5月「平年並み」、6月「やや低め」、7月「はなはだ低め」、
8月「かなり低め」、10月「やや高め」。

3. 現況 (2012年10月上旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部、南部ともに「平年並み」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「接岸傾向」。海面水温は「やや低め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「平年並み」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2012年11月～2013年3月）

対象海域 : 東シナ海～日本海西南海域

対象漁業 : まき網、定置網、その他

対象魚群 : 0歳魚（2012年級群（2012年生まれ））、1歳魚（2011年級群）、2歳魚（2010年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体 : 10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体 : 25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年を下回り、平年並み。

(3) 魚体 : 25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～30cmの0歳魚（豆・小銘柄）および32～38cmの2歳魚以上（中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量 : 前年を下回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 14～17cmの0歳魚（中羽銘柄）主体に、18～22cmの2歳魚以上（大羽銘柄）も漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量 : 前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 15～20cmの0歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量 : 前年並みで、平年を下回る。

(2) 漁期・漁場 : 漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体 : 10cm以上の0・1歳魚（大羽銘柄）が主体で、5cm程度の0歳魚（カエリ・小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2011年11月～2012年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2012年4月～8月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993～1998年には近年では高い水準を維持した。1998～2000年の加入量減少のため、資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年と同程度の高い水準で経過し、2004年にかけて資源量は増加した。2005～2007年の加入量水準は近年では低い水準となり、2008年にかけて資源量は減少したが、2008年以降には加入量は増加したとみられ、資源量も増加した。

東シナ海・日本海（青森県～鹿児島県）での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999～2002年は13万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2006年以降は減少して13万トン前後で推移し、2011年は13万8千トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970・80年代は比較的安定していたが、1992～1996年に増加傾向を示した後、1997年に急減した。1998～2000年にかけてさらに減少し、2000～2007年は低い水準で横ばい傾向を示していた。2008年の高い加入量のため、資源量は2008年に増加したが、2009年以降は横ばい傾向を示している。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半には27万～30万トンであったが、その後減少し、1990～1992年は13万～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降、漁獲量は増加傾向を示し、1996年に41万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少した。その後もさらに減少し、2000～2006年は9万トン前後で推移していた。2007年は10万6千トン、2008年は12万1千トン、2009年は13万1千トンと、2007～2009年にかけて緩やかな増加傾向を示したが、その後は2010年に11万8千トン、2011年に11万1千トンと緩やかに減少している。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992～2011年に比較的安定して同程度の水準で推移している。近年では、2004年級群の高い加入量のため、資源量は2005年に高い値を示した。その後、資源量は2008年にかけて減少傾向を示したが、2009年以降は緩やかな増加傾向を示している。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1980年代以降およそ5万トン前後で推移している。1999年に近年で最高の8万8千トンが漁獲された後、減少傾向を示し、2004年は3万1千トンであった。2005年には7万6千トンに増加したが、その後は再び減少傾向を示し、2010年は3万トンとかなり低い値を示した。2011年は2010年より増加し4万9千トンであった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にある。近年では、2010年級群の高い加入量のため、資源量は2010年に増加した。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983年から1991年までは100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少した。2001～2003年に漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年以降は漁獲量が増加傾向にあり、2010年には6千トン、2011年には4万4千トンであった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は、1970年代後半と1980年代後半に多く、1980年代前半および1990年代後半には少なかった。近年では、1990年代後半から2000年まで資源量は漸減傾向にあったが、2003年以降は増加傾向にある。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1981年から1989年にかけて徐々に増加し、1989～1993年は4万トン前後で推移したものの、その後減少した。2000年に1万3千トンとなった後は増加に転じ、2010年の漁獲量は2万9千トン、2011年の漁獲量は3万7千トンであった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1970年代から1980年代後半までは低く、1980年代後半から増加し始めた。1998～2000年の資源量水準は推定されている期間の中で高位であった。しかしながら資源量は2004年まで一旦減少した後、2007年にかけて増加したものの、2008・2009年に減少し、2010年と2011年は2009年と同水準であった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1982年に7万3千トンとなった後1990年まで減少した。その後、漁獲量は徐々に増加し、1998～2000年には12万トン以上となった。2001・2002年は漁獲量が一旦下がったものの、その後は再び増加し、2008年には9万7千トンとなった。2009年は5万1千トンと減少したが、2010年は6万6千トン、2011年は6万5千トンであった。

2. 漁況の経過

2012年4月～8月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、東シナ海中部および東シナ海南部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計4万3千トンで前年（2011年4月～8月、5万4千トン）並みであった。マアジは1万9千トンで前年（2万8千トン）を下回り、さば類は1万5千トンで前年（9千トン）を上回った。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、熊本県では前年を上回り、山口県は前年を下回り、その他の海域では前年並みで、全体としては前年並みで平年を下回った。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、海域によって差があるが、概ね前年・平年並みであった。漁獲の主体は24～32cmの1歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は31～37cmの2歳魚以上と28cm以下の0歳魚であった。マイワシは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は前半が18～21cmの2歳魚で、後半が8～16cmの0歳魚であった。ウルメイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は4・5月が20～24cmの1・2歳魚で、6月～8月は7～12cmの0歳魚であった。カタクチイワシは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は4・5月が8～10cmの1歳魚で、6月～8月は3～5cmの0歳魚と7cm以上の1・2歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11月～3月期には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2011年級群は2010年級群を上回る豊度と考えられる。2012年級群の評価は難しいが、2012年4月に東シナ海で行った稚魚分布調査、5・6月に東シナ海陸棚縁辺域で行った着底トロール調査、6月に東シナ海～山陰沿岸域で行った幼稚魚分布調査では前年を上回った。しかし、直近までの漁況は前年を下回る漁模様で推移しており、2012年級群は2011年級群並みか下回る豊度と考えられる。これらから、0歳魚（2012年級群）は前年並みか下回り、1歳魚（2011年級群）は前年を上回り、2歳魚（2010年級群）は前年並みで、全体の来遊量は前年並みと見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE（1日1隻当たり漁獲量）（参考図参照）は、2007年から2008年

にかけて減少したが、2009年以降は増加している。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は2007年から2009年にかけて減少したが、2010年以降、増加している（参考図参照）。来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年を下回ると考えられる。

(2) マサバ

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。2010年級群の豊度は2009年級群より高く、2011年級群の豊度は2010年級群より低いとみられる。2012年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2011年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0歳魚（2012年級群）は前年並み、1歳魚（2011年級群）は前年を下回り、2歳魚（2010年級群）は前年を上回ることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年・平年を下回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11月～3月期には0歳魚（豆銘柄）と1歳魚（小銘柄）が漁獲の主体となる。沿岸域では1月～3月期には2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。2010年級群の豊度は2009年級群よりも低く、2011年級群の豊度は2010年級群と同程度とみられる。2012年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2011年級群と同程度の豊度とみられる。これらから、0歳魚（2012年級群）は前年並み、1歳魚（2010年級群）は前年並み、2歳魚（2009年級群）は前年を下回り、全体の来遊量は、0・1歳魚が主体となることから前年並みと考えられる。

来遊量が前年並みであることを反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から判断して、前年を下回り、平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚（中羽銘柄）が主体に、1歳魚以上（大羽銘柄）も漁獲される。これまでの漁況の経過より、2010年級群は近年では最大の豊度であると考えられる。2011年級群の豊度は2010年級群を下回ると考えられる。2012年級群の評価は難しいが、漁況の経過から2011年級群と同程度の豊度とみられる。以上より、全体の来遊量は前年を下回り、平年並みと考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、11月～3月期には0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が漁獲の主体となる。各県の4月～8月の漁況からみると2012年級群の豊度は2011年級群と同程度か上回り、2011年級群の豊度も2010年級群並みであったと考えられる。全体として来遊量は前年・平年並みと考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚秋季発生群（小羽銘柄）と、0歳魚春季発生群（大羽銘柄）および1歳魚（大羽銘柄）が漁獲の主体となる。春季発生群でみると2012年級群の豊度は2011年級群と同程度と考えられる。秋季発生群の2012年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2011年級群と同程度と考えるのが妥当であろう。全体として来遊量は前年並みで平年を下回ると考えられる。

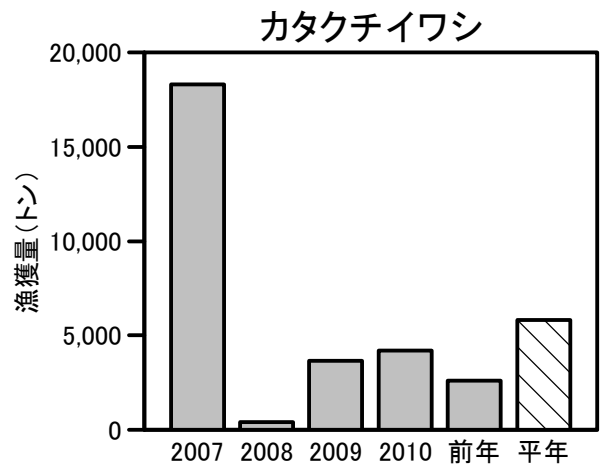
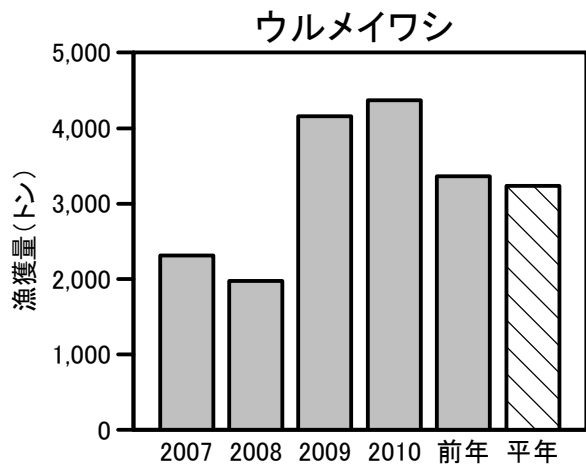
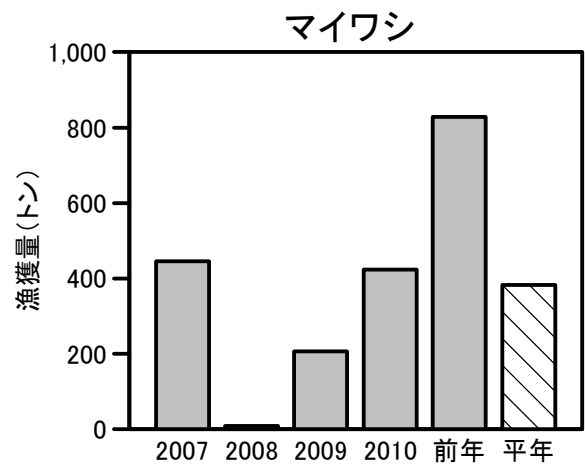
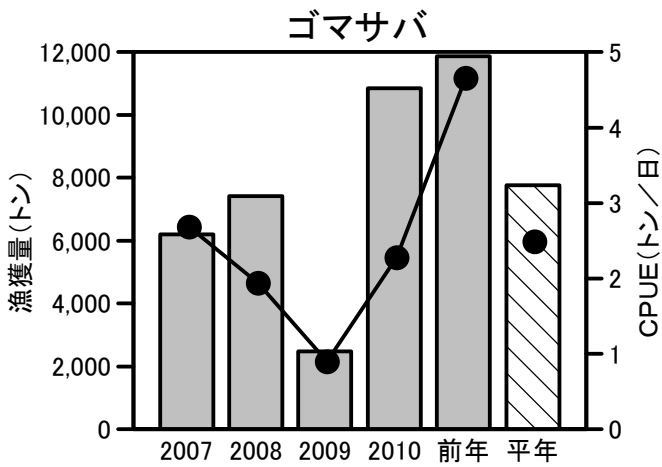
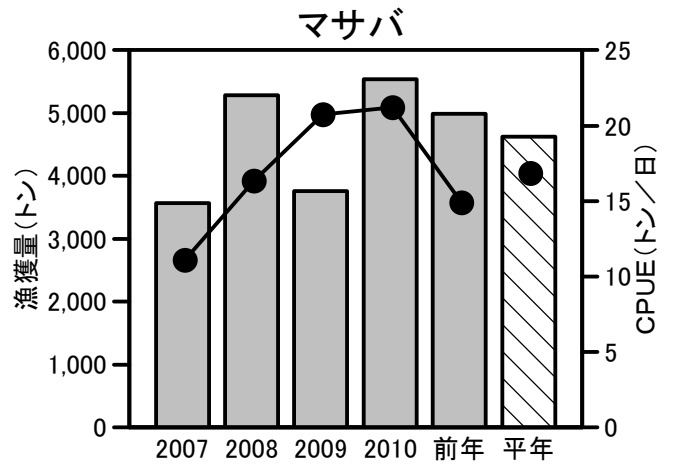
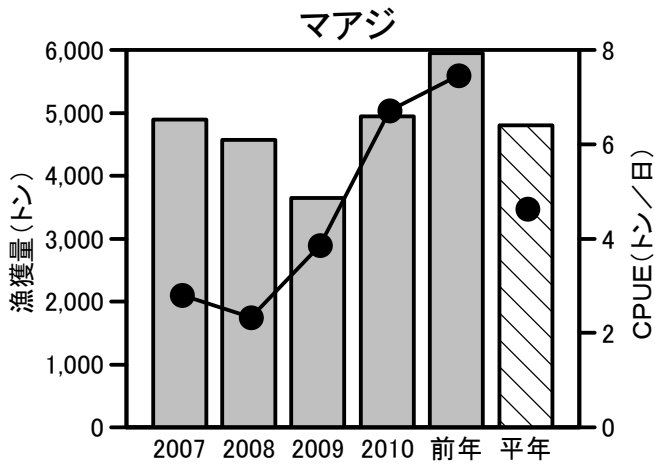
表1. 沿岸域の漁況経過（2012年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網の水揚量は893トンで、前年・平年を下回った（前年比56%、平年比52%）。	中型まき網の水揚量は当歳魚主体の328トンで、前年・平年を下回った（前年比45%、平年比53%）。	
福岡	代表港中型まき網の水揚量は434トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比100%、平年比73%）。0歳魚の平年比は53%、1歳魚の平年比は75%であった。 棒受網の水揚量は9トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比98%、平年比28%）。	代表港中型まき網の水揚量678トンで、前年・平年を上回った（前年比253%、平年比260%）。ギリ銘柄が主体であった。 棒受網の水揚量はほぼなく、不漁であった（平年比2%）。	代表港中型まき網の水揚量は14トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比113%、平年比27%）。
佐賀	前年・平年並みであった（前年比113%、平年比115%）。	前年・平年を上回った（前年比1091%、平年比294%）。	
長崎	地域により差があるが、前年並みで、平年を下回った（前年比109%、平年比69%）。	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った（前年比108%、平年比126%）。	
熊本 牛深港	水揚量は90トンで、前年（34トン）を上回り、平年（118トン）を下回った（前年比263%、平年比77%）。	水揚量は148トンで、前年（135トン）並みで、平年（352トン）を下回った（前年比109%、平年比42%）。	
鹿児島	主要4港のまき網では、小アジ・豆アジ（2011年級群）主体で、中アジ（2010年級群以上）混じりの漁獲があった。4月は低調で、5月以降は前年を上回ったが、アジ仔（2012年級群）の加入が悪く、7月以降は平年を大きく下回った。 期間中合計で627トンの水揚げで、前年（599トン）並みで、平年（1167トン）を下回った（前年比105%、平年比54%）。		主要4港のまき網では、4月以降、ゴマサバ中小・中（2010年級群・2009年級群）主体に、ゴマサバ豆（2012年級群）混じりで漁獲されたが、5月以降は前年・平年をかなり下回り、低調に推移した。 期間中合計で4048トンの水揚げで、前年（14545トン）・平年（7996トン）を下回った（前年比28%、平年比51%）。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網の水揚量は2トンで、前年・平年を下回った(前年比27%、平年比15%)。湊地区の棒受網・すくい網では、まとまって漁獲されなかった。	湊地区の棒受網・すくい網の水揚量は7トンで、前年・平年を下回った(前年比24%、平年比8%)。	湊地区の棒受網・すくい網の水揚量は小中羽主体に881トンで、前年・平年を下回った(前年比77%、平年比68%)。
福岡	代表港中型まき網の水揚量は43トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比161%、平年比53%)。棒受網の水揚量は14トンで、前年を上回り、平年を下回った(前年比166%、平年比34%)。	代表港中型まき網の水揚量は135トンで、前年を上回り、平年並みであった(前年比1395%、平年比113%)。棒受網の水揚量は0.3トンで、前年・平年を下回った(前年比1%、平年比2%)。	代表港中型まき網での水揚げはなかった。棒受網の水揚量は53トンで前年並みで、平年を下回った(前年比93%、平年比63%)。
佐賀	前年・平年を下回った(前年比0.1%、平年比0.0%)。	前年を上回り、平年を下回った(前年比1249%、平年比12%)。	前年・平年を下回った(前年比59%、平年比59%)。
長崎	地域により差があるが、前年を下回り、平年を上回った(前年比34%、平年比121%)。	地域により差があるが、前年・平年を上回った(前年比173%、平年比232%)。	地域により差があるが、前年・平年を下回った(前年比46%、平年比38%)。
熊本 牛深港	水揚量は50トンで、前年(1666トン)・平年(397トン)を下回った(前年比3%、平年比13%)。	水揚量は955トンで、前年(513トン)・平年(392トン)を上回った(前年比186%、平年比244%)。	水揚量は1794トンで、前年(1868トン)・平年(1676トン)並みであった(前年比96%、平年比107%)。
鹿児島	主要4港のまき網では、6月～8月に小羽(2012年級群)主体に北薩海域でウルメイワシに混獲される程度で、まとまった来遊はなかった。期間中合計で、189トンの水揚げで、前年(2265トン)・平年(833トン)を下回った(前年比8%、平年比23%)。北薩海域の棒受網でも、期間中合計で、11トンの水揚げで、前年(460トン)・平年(119トン)を下回った(前年比2%、平年比9%)。	主要4港のまき網では、4月～6月は小羽(2011年級群)主体、7・8月は小羽(2012年級群)主体に好調な来遊となった。期間中合計で、3507トンの水揚げで、前年(1533トン)、平年(1331トン)を上回った(前年比229%、平年比264%)。北薩海域の棒受網では、まき網ほどのまとまった漁獲はなく、期間中合計で、738トンの水揚げで、前年(1078トン)を下回り、平年(879トン)並みであった(前年比68%、平年比84%)。	主要4港のまき網では、中・大羽(2011年級群)主体に、期間中合計で、565トンの水揚げで、前年(1015トン)・平年(1040トン)を下回った(前年比56%、平年比54%)。北薩海域の棒受網では、中・大羽(2011年級群)主体に、期間中合計で、377トンの水揚げで、前年(488トン)・平年(478トン)を下回った(前年比77%、平年比78%)。

注：「前年」は2011年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県（ゴマサバを含むが主にマサバ）、ゴマサバは鹿児島県（マサバを含むが主にゴマサバ）、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	沖縄県水産海洋研究センター
福岡県水産海洋技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
佐賀県玄海水産振興センター	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	独立行政法人 水産総合研究センター 西海区水産研究所
鹿児島県水産技術開発センター	